

岩波科学ライブラリー 162

『ザリガニ』 ニホン・アメリカ・ウチダ

川井 唯史 著 岩波書店 1,575円

ISBN 4-486-01754-4

本誌にも寄稿している川井唯史氏の最新刊。川井氏の本職は北海道立稚内水産試験場の職員である。主な調査・研究対象はコンブ類を中心とする海藻とウニ。ザリガニの研究はプライベートな時間を費やして行っているものであるが(川井氏曰く「日曜大工」ならず「日曜研究者」)、その熱意はもちろんのこと、興味の幅広さ、行動力には目を見張る。

国内各地や時には海外でのフィールド調査、飼育・観察、市民を巻き込んだ保全活動、ここまでは一般的だ。しかし、ザリガニへの川井氏の興味はまだ尽きない。ザリガニにまつわる史実を確認するため、標本や古文書を求めてドイツ、ロシア、アメリカなど海外の博物館、宮内庁や各地の水産試験場などの資料庫を駆け巡る。そうした幅広い調査・研究の成果を分かりやすくコンパクトにまとめたのが本書である。

北海道は現時点では日本で唯一、3種のザリガニが生息している地域だ。在来種であり絶滅危惧Ⅱ類のニホンザリガニ、外来種のウチダザリガニとアメリカザリガニである。本書では最もページを割いているニホンザリガニを中心に、生活史や生息環境について豊富なカラー写真やイラストと共に紹介している。

40歳代以上の方は子どものころにニホンザリガニ獲りをして遊んだ経験を持つ方も多いと思うが、本書を読めばザリガニがこれほど魅力的な生き物だったのかと認識を新たにす。卵は母親の腹に抱えられて孵化を待ち、稚ザリガニが生まれてからも1回脱皮するまで母親の腹部にしがみついているという「子煩悩」な一面。カルシウム分が少ない淡水の中で脱皮を繰り返すため、脱皮前に体内のカルシウム分を胃石に集め、脱皮後は速やかに胃石からカルシウム分を溶解させて体内に補給するという巧みな「業師」の一面。いずれも海から淡水に生息域を広げた進化の過程で獲得した仕組みであろうが、好奇心を刺激される生態に

満ち溢れている。

体色変化が多様なのもザリガニの不思議の一つ。青や白、オレンジのザリガニはどうしてできるのか。また、青や白のザリガニを作れるって本当? など興味津津の疑問にも答えている。

身近な生き物だったので食用や薬用に活用された歴史もあり、こうした博物誌的な内容も盛り込んでいる点が面白い。前述の胃石が「オクリカンキリ」の名で万能薬として珍重されていたり、大正天皇の即位を祝う式典にニホンザリガニのスープが供されたなど、綿密な古文書の掘り起こしによって史実を明らかにしていく。

外来種のウチダザリガニやアメリカザリガニについては、生態のほか、日本にやってきた経緯や、放流による拡散への警告を伝えている。一方で、本州以南ではアメリカザリガニが普通種になっており、飼育の機会も多いことから、飼育方法についても紹介している。ただし、北海道ではアメリカザリガニは道外ほど生息域を広げておらず、今後生態系に与える影響は未知数である。また、安易な飼育が放流につながることから、私としては飼育はお勧めできないが。

ニホンザリガニは豊かな自然や清流を象徴する生き物である。かつては身近な小川にもたくさん生息していたが、近年は開発や環境破壊、外来種の脅威により生息地が急激に失われている。と同時にザリガニ獲りに興じる子どもたちも減り、ザリガニへの関心が薄れつつある現状を川井氏は危惧している。「ザリガニを通して身近な水辺環境への関心も深めてもらいたい」というのが本書の意図でもある。

なお、本書を読んでもますますザリガニに興味を持たれた方は、川井氏の著作「ザリガニの博物誌 里川学入門」(東海大学出版会)をご一読いただきたい。

(野谷 悦子:フリーライター)